

**農福連携が
農業と地域を
おもしろくする。**

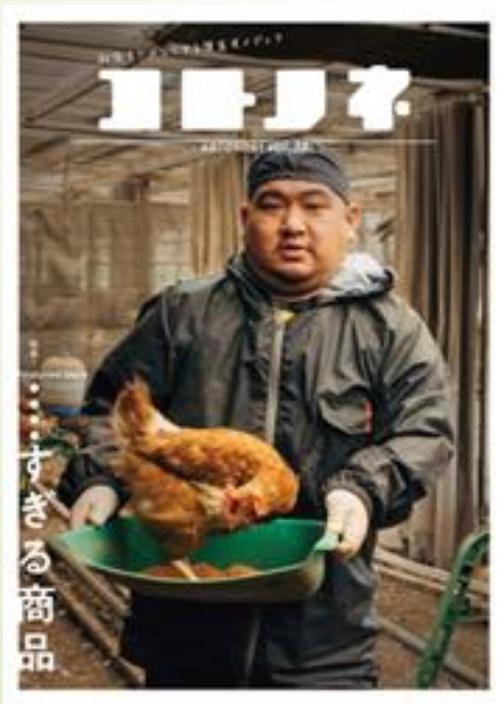
報告者；宮田喜代志

株式会社熊本地域協働システム研究所・相談役

株式会社農都共生総合研究所・特別研究員

農林水産省農林水産政策研究所・客員研究員

表題はこの本から取りました。
農福連携のバイブルです。





資料のご紹介；

ノウブク・マッチング・ハンドブック

農都共生総合研究所では、令和2年度下半期に九州農政局の令和2年度「農福連携マッチング体制構築プロジェクト」の調査研究事業を実施し、ハンドブックにまとめました。事例集と理論編に分けていますので、それぞれご活用ください。

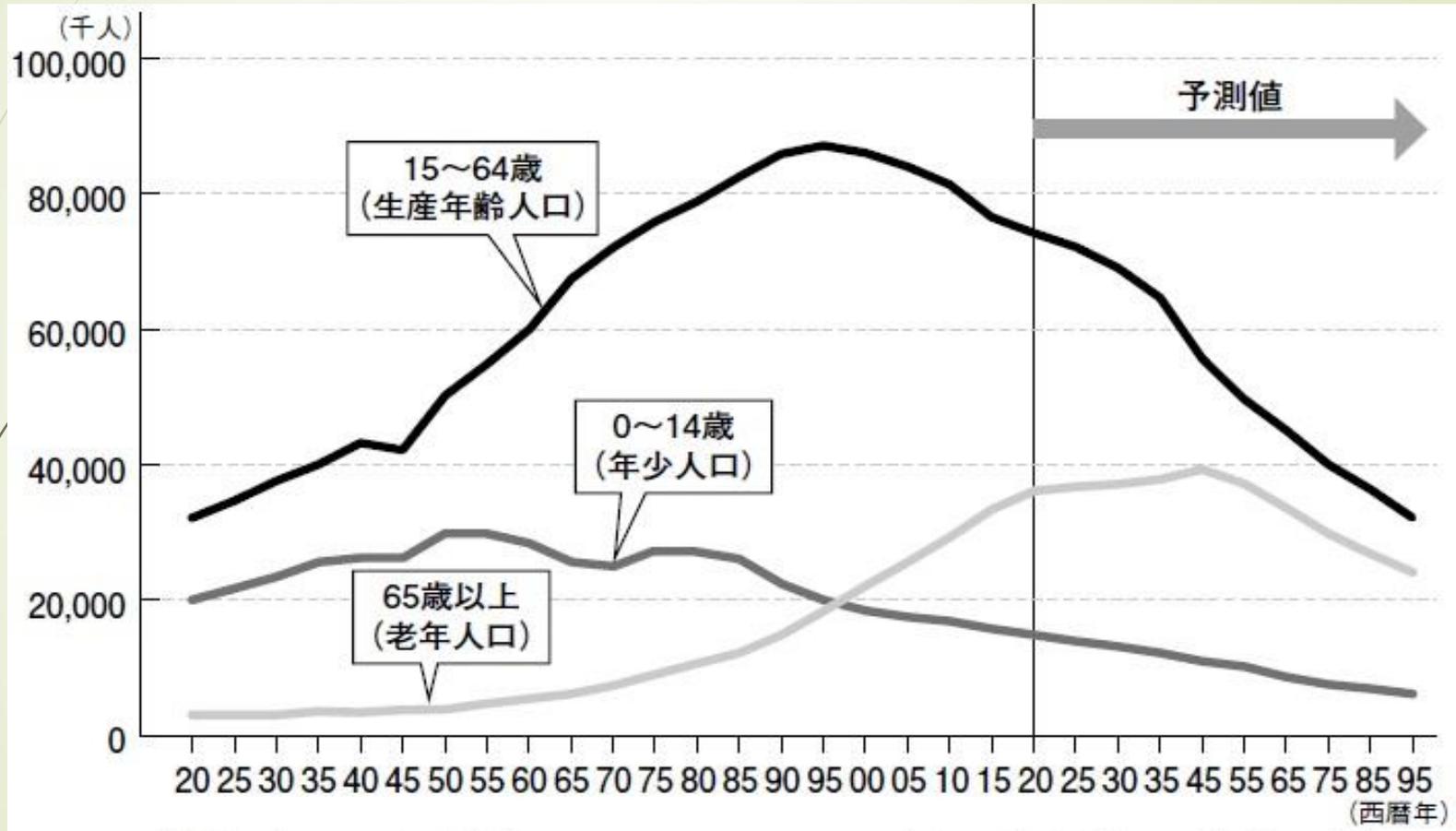
<https://www.notosoken.jp/>

・・・本日のお話し（目次）

はじめに；人口減少社会

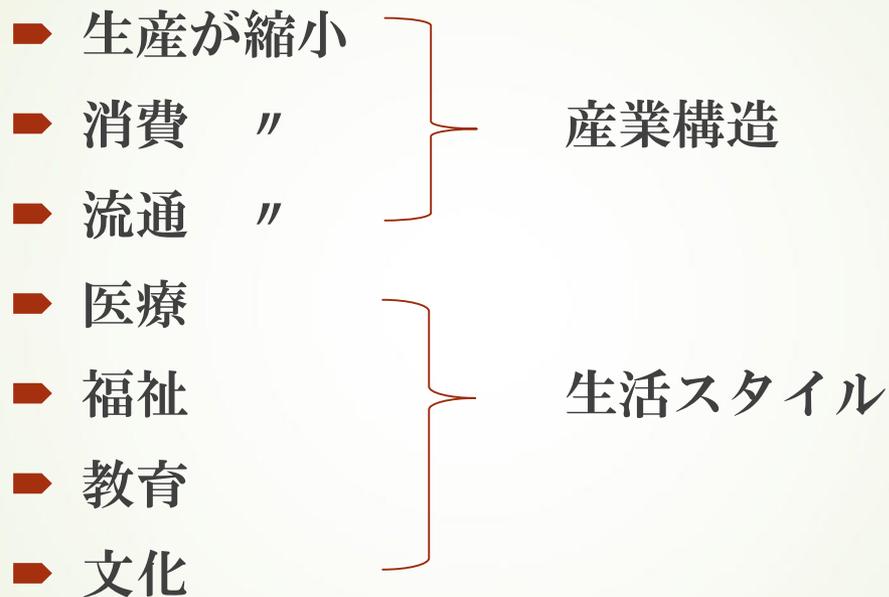
1. 農福連携とは？
 2. 農福連携の取り組み事例
 3. 農福連携で地域がおもしろくなる
 4. 地域共生社会と農福連携
 5. 新しい農業の潮流と農福連携
- おわりに；SDGs と農福連携

はじめに 基本問題は、人口減少社会



出所：国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成29年推計）」に基づき、石黒太郎氏作成。幻冬舎ゴールドオンラインより。

人口が減ると・・・



こうした状況の下、農福連携の役割り
は何か、考えてみたいと思います。

1. 農福連携とは？

- ① 農福連携の多様な広がり
- ② 農福連携発展の三段階
- ③ 農福連携；事業定着のポイント
- ④ 国策となった農福連携
※農福連携等推進ビジョン
- ⑤ 農福連携の広がりの推進

① 農福連携の多様な広がり

- ▶ **福祉から農業へ**；福祉事業所と農家等との連携により、まず障害者の就労機会づくりから始まり、それが発展して、工賃アップや事業収入拡大のために福祉事業所が農業部門を開設
- ▶ **農業から福祉へ**；農家・農業生産法人等が、部分的に障害者を雇い入れる施設外就労、共同受注
- ▶ **企業の参入**；企業が雇用率達成のため農業に参入し、特例子会社などを開設
- ▶ **市民協働型**；地域共生社会の実現のため、地域住民が手を携えて、交流の場・居場所づくり、子育て、社会教育を取り込んだ農福連携が登場

②農福連携発展の三段階

- ▶ **1st Step** マッチング＝農福連携の問題点は、農業者と障害者の出会いの場。
- ▶ **2nd Step** 1st Step が上手くいった先行者が多角経営化し多様な展開を見せる。
- ▶ **3rd Step** 地域でのネットワークが広がり地域になくってはならない事業所となる。
- ▶ さらに、地域共生社会が説かれる中で、新しい地域の担い手として期待されるようになってきている。

※マッチングとは、農業側の経済的効果への期待と福祉側の社会的効果への期待を整合させることです。

③農福連携；事業定着のポイント

- ▶ スタート時からの経緯を見てみると、年ゆくごとに**段階的に発展**している。
- ▶ 到達点では、複数の地域資源とつながり、**地域ネットワーク**が形成されている。
- ▶ 事業が持続的に発展するよう、資金調達、財務管理、労務管理などの**マネジメント力**があり、**工賃アップ**や支援力などの職場環境改善につながっている。

④ 国策となった農福連携

農福連携等推進ビジョン（概要）

資料1

I 農福連携等の推進に向けて

農福連携は、農業と福祉が連携し、障害者の農業分野での活躍を通じて、農業経営の発展とともに、障害者の自信や生きがいを創出し、社会参画を実現する取組。年々高齢化している農業現場での貴重な働き手となることや、障害者の生活の質の向上等が期待

農福連携は、様々な目的の下で取組が展開されており、これらが多様な効果を発揮されることが求められるところ

持続的に実施されるには、農福連携に取り組む農業経営が経済活動として発展していくことが重要で、個々の取組が地域の農業、日本の農業・国土を支える力になることを期待

農福連携を全国的に広く展開し、裾野を広げていくには「知られていない」「踏み出しにくい」「広がっていかない」といった課題に対し、官民挙げて取組を推進していく必要

また、ユニバーサルな取組として、高齢者、生活困窮者等の就労・社会参画支援や犯罪・非行をした者の立ち直り支援等、様々な分野にウイングを広げ、地域共生社会の実現を図ることが重要（SDGsにも通じるもの）

農福連携等の推進については、引き続き、関係省庁等による連携を強化

II 農福連携を推進するためのアクション

目標：農福連携等に取り組む主体を新たに3,000創出*

1 認知度の向上

- ・定量的なデータを収集・解析し、農福連携のメリットを客観的に提示
- ・優良事例をとりまとめ、各地の様々な取組内容を分かりやすく情報発信
- ・農福連携で生産された商品の消費者向けキャンペーン等のPR活動
- ・農福連携マルシェなど東京オリンピック・パラリンピック等に合わせた戦略的プロモーションの実施

2 取組の促進

○ 農福連携に取り組む機会の拡大

- ・ワンストップで相談できる窓口体制の整備 ・スタートアップマニュアルの作成
- ・試験的に農作業委託等を短期間行う「お試しノック」の仕組みの構築
- ・特別支援学校における農業実習の充実
- ・農業分野における公的職業訓練の推進

○ ニーズをつなぐマッチングの仕組み等の構築

- ・農業経営体と障害者就労施設等のニーズをマッチングする仕組み等の構築
- ・コーディネーターの育成・普及
- ・ハローワーク等関係者における連携強化を通じた、農業分野での障害者雇用の推進

○ 障害者が働きやすい環境の整備と専門人材の育成

- ・農業法人等への障害者の就職・研修等の推進と、障害者を新たに雇用して行う実践的な研修の推進
- ・障害者の作業をサポートする機械器具、スマート農業の技術等の活用
- ・全国共通の枠組みとして農業版ジョブコーチの仕組みの構築
- ・農林水産研修所等による農業版ジョブコーチ等の育成の推進
- ・農業大学校や農業高校等において農福連携を学ぶ取組の推進
- ・障害者就労施設等における工賃・賃金向上の支援の強化

○ 農福連携に取り組む経営の発展

- ・農福連携を行う農業経営体等の収益力強化等の経営発展を目指す取組の推進
- ・農福連携の特色を生かした6次産業化の推進 ・障害者就労施設等への経営指導
- ・農福連携でのGAPの実施の推進

3 取組の輪の拡大

- ・各界関係者が参加するコンソーシアムの設置、優良事例の表彰・横展開
- ・障害者優先調達推進法の推進とともに、関係団体等による農福連携の横展開等の推進への期待

III 農福連携の広がりへの推進

「農」と「福」のそれぞれの広がりを通じ、農福連携等を地域づくりのキーワードに据え、地域共生社会の実現へ

1 「農」の広がりへの支援

林業及び水産業において、特殊な環境での作業もあることにも留意しつつ、障害特性等に応じた、マッチング、研修の促進、経営発展を目指す取組の推進、林・水産業等向け障害者就労のモデル事業の創設

2 「福」の広がりへの支援

高齢者、生活困窮者、ひきこもりの状態にある者等の働きづらさや生きづらさを感じている者の就労・社会参画の機会の確保や、犯罪や非行をした者の立ち直りに向けた取組の推進

⑤農福連携の広がりへの推進

▶ 「農」の広がりへの支援

林業及び水産業において特殊な環境での作業もあることにも留意しつつ、障害特性等に応じたマッチング、研修の促進、経営発展を目指す取組の推進、林・水産業等向け障害者就労のモデル事業の創設

▶ 「福」の広がりへの支援

高齢者、生活困窮者、ひきこもりの状態にある者等の働きづらさや生きづらさを感じている者の就労・社会参画の機会の確保や、犯罪や非行をした者の立ち直りに向けた取組の推進

農福連携を地域づくりのキーワードに据え、地域共生社会の実現へつなぐ取り組みが始められています。

2. 農福連携の取り組み事例

マッチング・ハンドブックも参照しながら、実践事例を画像、YouTubeで見てください。



さんさん山城; <https://www.youtube.com/watch?v=0xXv7nCVqiI&t=8s>

3. 農福連携で 地域がおもしろくなる

さて、私たちは、
なぜ農福連携にこだわるのか？

自治体消滅論、限界集落論、後継者不足、耕作放棄地。地方創生と言うけれど、出口の見えない地域。手を拱いていていいのか？…という問題認識に立っています。



農福連携で‘おもしろくなる’のはなぜか？
その条件は何かを考えてみましょう。



言い換えると、
農福連携は地域課題解決の糸口
となりつつありますが、
なぜそう言えるのでしょうか？

- ①農福連携を進めると地域にどんな効果が期待されるか？
- ②農福連携を担うのはだれか？
- ③小さいことはいいことだ！

農福連携の主体は、ほとんどが地域の中小企業・小規模事業者です。この事実をどう考えるか？

①農福連携を進めると地域に どんな効果が期待されるか？

- 各地の経験から、農福連携を中心に地域づくりのプロセスで多様な結び付きが生まれ、**新しい地域コミュニティが形成される**ことが分かってきました。（吉田）
- 単に農村の人手不足解消（労働力の需要と供給のマッチング）にとどまらない。
- 農福連携は、すぐれて**地域経済を担うのはだれか？**という、地域にとっては基本問題であることが分かってきました。

②農福連携を担うのはだれか？

- 現実に地域にいる農福連携の主体は、大企業でも公機関でもなく、**小規模な事業者**であるということを忘れてはなりません。

- 経済主体
 - 生活主体
 - 文化主体
- 地域共生社会の主体**

※主体の問題を考えるときは客体（ここでは地域・地域住民）の諸条件も考えなければなりません、本日は割愛します。

③小さいことはいいことだ！

- ▶ 中小企業や小規模事業者は、自らが地域で生活し地域で活動をしているため、地域の特定の課題を理解しやすい「眼鼻が利く」状態にあります。
- ▶ 生活舞台で見出される個別具体的な課題に臨機応変に対応しながら、国や大企業の画一的ではない多様な課題解決を提案することが出来ます。
- ▶ 農福連携の主体は、コミュニティ性が強く、地域住民と重層的な関係性を持っていることが多いので、協働で課題解決を行うことが出来ます。
- ▶ 「福」の広がり、とりわけ教育との結合は、次世代の育成や知識・技術・文化の継承、持続可能な社会をつくる基礎となります。



小さいことはいいことだ！ は、時代の流れです。

- 小農民と農村で働く人々の権利に関する宣言（2018年）
- 中小・マイクロ企業の日（2017年）
- 障害者の権利条約（2006年）
- 『スモール・イズ・ビューティフル』
人間中心の経済学（E・F・シューマッハー
著、講談社学術文庫、原著1973年）

4. 地域共生社会と農福連携

①地域共生社会ビジョンについて

地域共生社会とは、**将来的に日本社会全体で実現していこうとする社会全体のビジョン**のことです。農業や福祉、地域再生などの各方面の仕組みを束ねて、地域で「共生社会」を実現していこうというものです。

「農福連携等推進ビジョン」中でも地域共生社会構想に呼応して「福」の広がりを打ち出しています。

「高齢者、生活困窮者、ひきこもりの状態にある者等の働きづらさや生きづらさを感じている者の就労・社会参画の機会の確保や、犯罪や非行をした者の立ち直りに向けた取組」が、地域の実情に即して推進されることになっています。

②地域共生社会の担い手＝農福連携

- 地域共生社会を実現していくためには、具体的にそれを担う主体がだれかと言うことが重要になってきます。まさにその一つが、**農福連携の地域ネットワーク**です。

※農福連携の地域ネットワークについては、ハンドブックP69-70を参照ください。

- 各地の経験から、**農福連携を中心にして地域づくりのプロセスで多様な結び付きが生まれ、新しい地域コミュニティが形成される**ことが分かっています。
- 農業が主体の地方では、**地域共生社会の実現のためには、とくに農福連携が重要な役割を果たしていくことになる**のです。農福連携の活動が、日本社会の未来を豊かにする第一歩となるのです。

5. 新しい農業の潮流と農福連携

①みどりの食料システム戦略（政策）

<https://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/midori/index.html>（農水省）

②住民参加の市民協働型農業実践

市民農園、グリーンツーリズム、農泊、教育ファーム、コミュニティ・マーケット、医福連携、農福連携、CSAの登場等々、**都市集中型の生活スタイルへの疑問と行動転換**という動きの一つと考えられます。

③多様な有機農業の展開

化学物質偏重への反省と原点回帰への志向が、**持続可能な農法**を導き始めています。各地で多様に取り組まれてきた有機農業が、**科学的な共通言語**で語られ整理されようとしています。…例えば土壌改良菌、土の中の物質循環の平衡

さいごに 農福連携とSDGs

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



ご清聴ありがとうございました。

農が福祉と人を結びつける講座・公開実施中！

<https://noufuku2020.wixsite.com/noufuku>



2020noufukuがパスコード